

今週の為替相場見通し(2024年6月24日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		157.15 ~ 159.87	159.86	157.00 ~ 161.00
ユーロ	(ドル)		1.0671 ~ 1.0761	1.0694	1.0550 ~ 1.0800
(1ユーロ=)	(円)		168.00 ~ 170.89	170.89	168.50 ~ 173.00
英ポンド	(ドル)		1.2622 ~ 1.2738	1.2643	1.2400 ~ 1.2700
(1英ポンド=)	(円)	*	199.07 ~ 202.08	202.06	199.00 ~ 204.00
豪ドル	(ドル)		0.6586 ~ 0.6679	0.6641	0.6600 ~ 0.6750
(1豪ドル=)	(円)	*	103.59 ~ 106.17	106.14	105.00 ~ 108.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1)今週の予想レンジ: 157.00 ~ 161.00 円

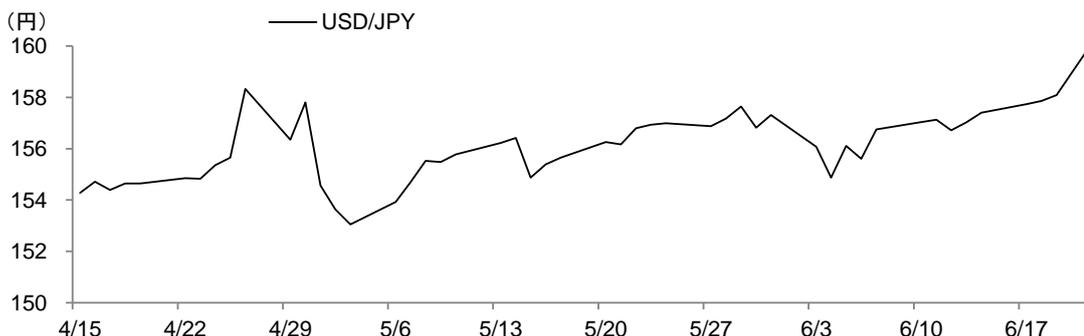
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は159円台後半まで上昇し、前介入水準に迫った。週初17日、157.52円でオープンしたドル/円は日本株の下落などリスクオフの展開に一時週安値の157.15円まで下押し。海外時間は、米金利が上昇する中で米6月NY連銀製造業景気指数の良好な結果に、157円台後半まで上昇。18日、ドル/円は植田日銀総裁の7月利上げの可能性に言及した国会答弁を受け、一時157円台半ばまでじり安。海外時間は、米金利上昇に連れ158円台前半まで上伸後、米5月小売上高の弱い結果を受け米金利が低下に転じ、157円台半ばに値を戻した。19日、米国休場の中、ドル/円は手掛かり材料を欠くも、薄商いの中で再び158円台前半までじり高推移。20日、ドル/円は米金利上昇を受け、158円台前半でじり高。海外時間は複数の米経済指標の軟調な結果を受け一時的に下押しも、FRB高官によるタカ派発言が材料視されてか米金利が上昇し、約1か月半ぶりの高値圏水準まで上値を伸ばし、159円手前まで上昇。21日、ドル/円は仲値にかけて輸入企業のドル買いの勢いで159円台に乗せるも介入警戒感からか一段の上値追いはならず。海外時間、米6月製造業、サービス業PMIが共に予想を上回ったことから159円台半ばまで上伸。その後もドル買いだけでなくクロス/円の上昇もサポートとなり、週高値の159.87円まで上げ幅を拡大。結局、159.86円で越週した。

今週のドル/円は日銀による介入を警戒しつつ、高値圏での底堅い推移を予想する。FRBによる金融引き締め長期化が想定される中でキャリー取引は根強く、先週は週末にかけて159円台後半まで値を伸ばした。今週も円安圧力は継続するとみられ、まずは4月29日の介入水準160.24円を試す動きとなろう。イエレン米財務長官によるけん制、米財務省による外国為替報告書の監視リスト追加など、幾分か介入警戒感は和らいでいると思われる。また、28日(金)に公表される米5月PCEデフレーターにも注目が集まるが、直近の米インフレ指標同様に鈍化予想となっている。しかし、FRBがその結果を以ってハト派化するとは考えにくく、サプライズは市場予想を上回る展開か。ただ、下落リスクも視野に入れる必要がある。先週末から本邦当局者もけん制トーンを強めている他、米財務省による監視リスト追加は大幅な対米貿易黒字や経常黒字が要因であり、介入について月次で公表されていることから問題視されないとの考えもある。以上を踏まえれば、介入を警戒した神経質な展開は避けられない。他方、週末には仏下院選挙も控えていることから欧州の政情不安は高まりやすく、リスクオフ的な下落も警戒すべきだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/17~6/21)の値動き: 安値 157.15 円 高値 159.87 円 終値 159.86 円



2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.0550 ~ 1.0800 168.50 ~ 173.00 円

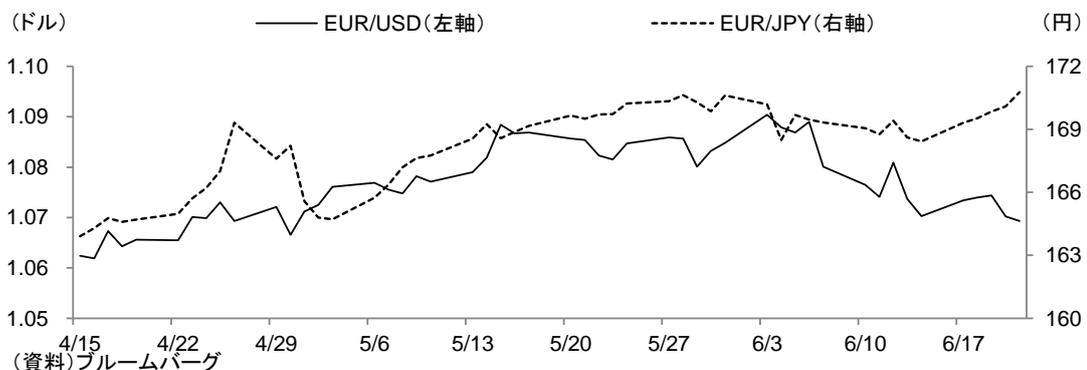
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初17日のユーロ/ドルは1.0703でオープン。週末のフランス極右政党の党首ルペン氏の発言を受けたフランスの政治不安の後退を背景に、ユーロ買いが優勢。米金利も上昇する展開の中、勢いはなかったものの、じりじりと1.07台前半まで値を上げた。18日は引き続き欧州の政治不安の後退に加えて、米経済指標が予想を下回ったことを受けた米金利低下をサポートに、一時週間高値となる1.0761まで上昇。その他の材料に乏しく、更なる上値追いつとはならない中で、1.07台半ばを中心に底堅い推移となった。19日は米国休日で市場参加者も少なく、方向感のない推移。注目された英5月CPIの結果も、ユーロ相場に大きく影響を及ぼすものとはならなかった。20日はスイス国立銀行(SNB)が市場予想に反して利下げを実施。イングランド銀行(BOE)もハト派的と捉えられた欧州金利の低下につれて、やや軟調な推移。米金利の上昇もユーロの上値を押さえ、1.07ちょうど近辺でローズした。21日は仏独6月PMIが製造業、サービス業ともに予想を下回る結果に、一時週間安値となる1.0671まで下落。ユーロ圏6月PMIの結果も弱かったことや、その後発表された米6月PMIが予想を上回ったことが、終盤にかけてもユーロの上値を押さえ、1.0694で越週した。

今週のユーロ/ドルは軟調な推移になることを予想する。フランス極右政党からマクロン大統領との協調姿勢が示されたことにより、一旦は最悪期を脱した感があるものの、他国を含めて欧州圏の政治不安は燻っている状況。30日に予定されているフランス下院選挙に向けて新たなヘッドラインが出る可能性もあり、依然リスクイベントしてユーロの上値を押さえる要因になるといえよう。また先週はスイス国立銀行(SNB)が前回会合に続いて利下げを実施。イングランド銀行(BOE)も政策金利は据え置いたものの、利下げ主張に2票投票されたことが、ハト派的な立ち位置として捉えられた。上述金融緩和の流れに加えて、21日(金)に発表された欧州各国PMIの軒並み予想を下回る結果を受けた欧州圏全体の景気動向への懸念が、ECBの利下げ織り込みを早める可能性は十分想定される。一方、米国は、個人消費を中心に弱めの経済指標の結果が目立つようになって来たものの、利下げの早期開始を織り込むに値する材料は未だ見当たらず、FRB高官の発言内容にも依然慎重な姿勢が伺える。既に利下げに動き始めた欧州との金融政策スタンスの違いが意識される中、欧州通貨の金利妙味の剥落、経済の格差がユーロには逆風になると考えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/17~6/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.0671 高値 1.0761 終値 1.0694
(対円) 安値 168.00 高値 170.89 終値 170.89



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2700 199.00 ~ 204.00 円

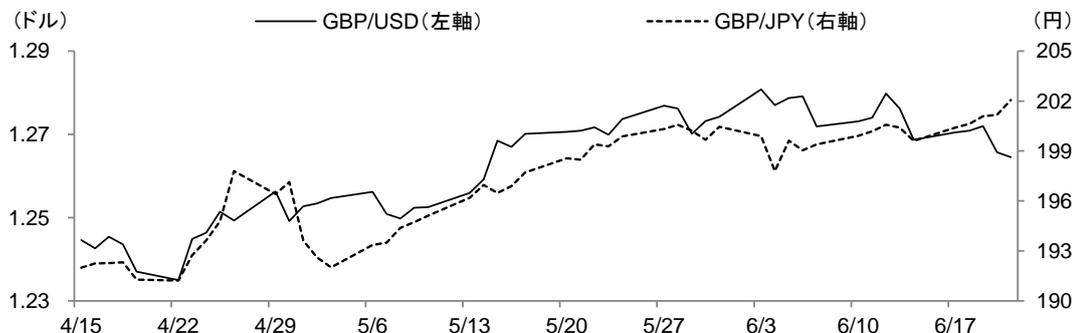
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンドは対ドルで続落。英5月CPI発表後に上昇、翌日のイングランド銀行(BOE)の政策発表後に下落の流れとなった。堅調な米経済指標や、米FRB高官のタカ派発言も、対ドルでのポンド軟調に寄与した形だ。もっとも、ポンドは対円や対ユーロではむしろ堅調に推移している。6月19日に発表された英5月CPIは前年同月比+2.0%と、市場予想に一致。4月の同+2.3%から低下し、BOEのインフレターゲット(前年比+2%)以内へのCPIの伸び率低下は2021年7月以来、約3年ぶりとなる。もっとも、サービス価格の伸び率が前年同月比+5.7%と高止まりが続いていることもあり、BOEは利下げを急がないという見方が広がり、英ポンドはCPIの発表後、対ドル1.2710から1.2733まで約0.2%上昇した。6月20日のBOE金融政策決定会合では政策金利が市場予想通り5.25%で据え置かれた。5月会合と同様、利下げ票2に対し据え置きが7票だった。フォワードガイダンスでは、「十分に長い時間引き締めを維持する必要がある」、「現在の政策金利の水準をいつまで維持すべきか検討を続ける」という文言が維持された。議事要旨では、BOEが5月に公表した見通しと比較してサービスインフレ率の高止まりが続いていることについて、一部委員から「デysinフレ軌道の見通しを大きく変えるものではない」、「利下げ回避決定は、微妙なバランス」という見解が示されたことが注目される。短期金利市場では、8月会合での利下げの織り込みが拡大。▲25bpの利下げの可能性が会合前日の36%から会合後は60%超に上昇した。ポンドは金融政策発表直後に対ドル1.2705から1.2680まで約0.2%下落した。

今週1週間は、フランスの政治情勢の不透明感が欧州金融市場全体の重しとなり、ポンドも対ドルでは上値の重い展開となろう。フランスの総選挙が週末の6月30日(日)に控え、極右(ないし極左)勢力の台頭が意識されるなかで、欧州の金融市場は神経質な展開となりそうだ。翌週の7月4日(木)に控えるイギリスの総選挙は労働党の圧勝・政権交代が確実視されている状況だが、保守党の議席数がどこまで減少するかにも注目が集まっている。対ユーロでは、選挙の結果が相対的に見通ししやすいポンドが堅調な展開となりそうだ。対円では、1ドル=160円を前に、介入警戒感が円をサポートする可能性もあるが、むしろ160円を明確に上に抜けた場合にドル/円の上昇が加速、つられてポンド/円も押し上げられる展開に注意したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/17~6/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.2622 高値 1.2738 終値 1.2643
(対円) 安値 199.07 高値 202.08 終値 202.06



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6600 ~ 0.6750 105.00 ~ 108.00 円

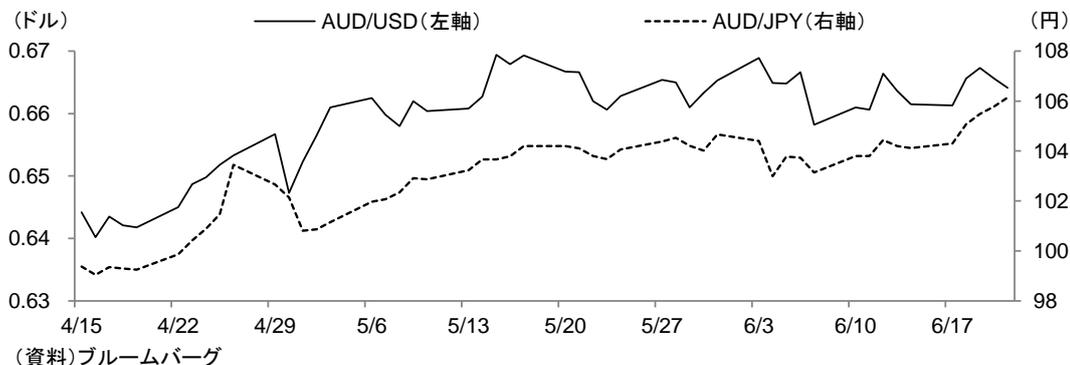
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.65台後半から0.66台半ばまで上昇。週初17日、0.6612でオープンした豪ドルはアジア時間じりじりと下落。フランスの政局不安を背景としたリスクオフの動きから債券に買いが集まり、豪金利が低下する中で、一時週安値となる0.6586まで下落。その後はNY時間において米株の上昇をきっかけに反転し、0.66台まで上昇。18日、RBAでは政策金利据え置きが決定。声明文ではインフレ上昇リスクの警戒を再認識すると指摘。その後、ブロックRBA総裁による記者会見では今回の理事会で利上げも検討したことが言及され、豪ドルは買いが優勢となる展開。NY時間に発表された米5月小売上高は前月に引き続き予想を下振れし、ドル売り豪ドル買いとなった。19日、米国休場の薄商いの中、方向性に乏しい動きとなった。20日、アジア時間は材料難から小動き。NY時間で発表された米5月住宅許可件数・着工件数、米6月フィラデルフィア連銀景況観が共に下振れたことで、ドル売り豪ドル買いとなり、一時週高値の0.6679まで上昇。しかしながら、フィラデルフィア連銀の販売価格が上昇していることを背景に米金利が上昇すると豪ドルは上値重く推移し、0.6656でクローズ。21日、米6月PMIについて製造業、サービス業ともに予想を上回り、ドル買い優勢となり豪ドルは下落。米株が軟調に推移する中、豪ドルも上値重く0.6641で越週。

今週の豪ドルは底固く推移するものと予想。先週のRBAでは政策金利据え置きが決定された一方で声明文やブロックRBA総裁の発言はタカ派な内容。声明文では「インフレを目標に戻すことが優先事項」とし、「インフレを物価目標に戻すという固い決意を持ち続けており、その結果を達成するため、必要なことを行う」との文言が追加された。また、その後のブロックRBA総裁からは利上げの検討が理事会でなされたとの言及があると市場の利下げ織込みは後退し、豪ドルが買われる展開となった。今週は26日(水)発表の豪5月CPIに注目が集まる。4月CPIが昨年11月以来の水準となる3.6%まで上昇となり、インフレ目標から遠ざかった。結果が上振れするようであれば、市場は追加利上げを織込み、豪ドルの更なる上昇に繋がると考える。ただし、月末のフランス選挙を前に足許警戒感が薄れている政局不安が再燃するようであれば、リスクオフの動きから豪ドルは上値重く推移する局面もリスクとして見ておきたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/17~6/21)の値動き: (対ドル) 安値 0.6586 高値 0.6679 終値 0.6641
(対円) 安値 103.59 高値 106.17 終値 106.14



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。